

県営ほ場整備(上戸地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

珠洲市

寺社今社遺跡・高照寺墓地

2005

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

じ し ゃ こ ん し ゃ い せ き こ う じ ょ う じ ぼ ち
寺社今社遺跡・高照寺墓地

2005

石 川 県 教 育 委 員 会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は寺社今社遺跡と高照寺墓地の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は珠洲市上戸町寺社地内である。
- 3 調査原因は県営ほ場整備事業(上戸地区)であり、同事業を所管する石川県農林水産部農業基盤整備課(旧農地整備課)が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は(財)石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて平成14(2002)年度から平成16(2004)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査・出土品整理・報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県農林水産部農業基盤整備課と、文化庁の補助を受けた石川県教育委員会が負担した。
- 6 現地調査は平成14年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記のとおりである。

期 間 平成14年10月1日～同年11月21日
面 積 寺社今社遺跡470㎡、高照寺墓地100㎡
担当課 調査部調査第2課
担当者 白田義彦(主任主事)、谷内明央(主事)
- 7 出土品整理は平成15(2003)年度に実施し、企画部整理課が担当した。
- 8 報告書刊行は平成16年度に実施し、調査部調査第2課が担当した。第2章以外の執筆と、編集は谷内明央(調査部調査第2課主事)が行った。

第2章：安 英樹(調査部調査第4課主査)、宮川勝二(調査部調査第3課主事)
- 9 調査には下記の機関、個人の協力を得た。

石川県農林水産部農業基盤整備課、奥能登農林総合事務所(旧珠洲農林総合事務所)、珠洲市教育委員会
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は磁北である。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海拔高)による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。
 - (4) 須恵器の断面は黒塗りし、内黒・赤彩・被熟痕はスクリーントーンを使用した。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 出土品整理・報告書刊行	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 寺社今社遺跡	9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構	9
第3節 遺物	11
第4章 高照寺墓地	27
第1節 調査の概要	27
第2節 遺構と遺物	27
第5章 まとめ	33

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

県農林水産部農地整備課（以下、農地整備課。現農業基盤整備課）は農地の生産性を向上させるために、農地・用排水路・農道等の整備を一体的に行う、ほ場整備事業を実施している。一方、県教育委員会文化財課（以下、文化財課）は開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るため、事前に事業内容の照会を行っている。

農地整備課は珠洲市上戸町寺社地内に、ほ場整備事業を計画し、埋蔵文化財分布調査を文化財課に依頼した。試掘の結果、調査区域の一部で埋蔵文化財が確認された。約20,000㎡の範囲に及ぶ古代～中世の集落跡（寺社今社遺跡）と約3,200㎡の範囲に及ぶ中世～近世の墓地跡（高照寺墓地）である。文化財課は分布調査の結果を農地整備課に回答し、埋蔵文化財の保護が図られるよう設計の見直しを要請した。双方協議の結果、田面部分については盛土で埋蔵文化財を保護し、排水路敷設部分のように工事の影響が遺跡に及ぶ箇所については発掘調査対象とすることで合意がなされた。

農地整備課は文化財課に発掘調査を依頼し、文化財課は（財）石川県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）に発掘調査を委託した。調査は調査部調査第2課が担当した。

第2節 調査の経過

平成14年9月13日に珠洲農林総合事務所・文化財課・埋文センターとの間で現地協議が行われ、調査範囲・調査箇所の優先順位・作業員の雇用・プレハブ設置場所・駐車場所等を確認した。当初の調査範囲は340㎡であったが、文化財課による再試掘の結果、遺跡範囲は広がり、調査対象面積が230㎡増となった。協議の結果、高照寺墓地→寺社今社A区→寺社今社B区の順で調査することとなり、終了後、順次現地を引渡していくということで合意がなされた。

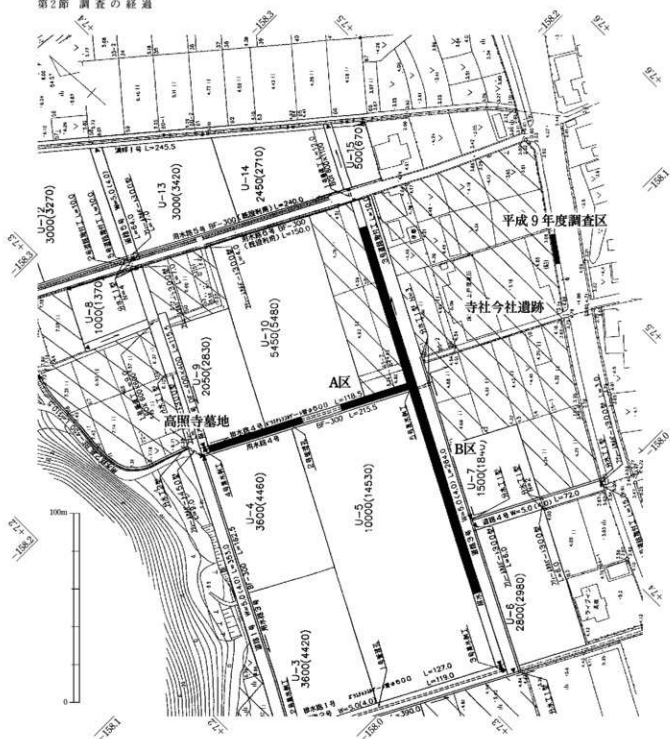
9月30日に器材を搬入した。10月1日に表土除去を行った。2日から作業員を投入し、高照寺墓地の杭打ち・壁立て・側溝掘削を開始し、翌日から遺構検出・掘削を行い、順次写真撮影・実測を行っていった。8日に高照寺墓地の遺構掘削が完了し、作業員の大半を寺社今社A区に移し、遺構検出・掘削を開始した。10日には寺社今社A区の遺構掘削が完了し、寺社今社B区の調査に着手した。15日には高照寺墓地の実測が完了し、引渡しを行った。11月7日に寺社今社B区の遺構掘削が完了し、12日に実測が完了した。13日に借上機材を返却し、14日に撤収し、現地作業は終了した。21日に寺社今社B区の引渡しを行った。

第3節 出土品整理・報告書刊行

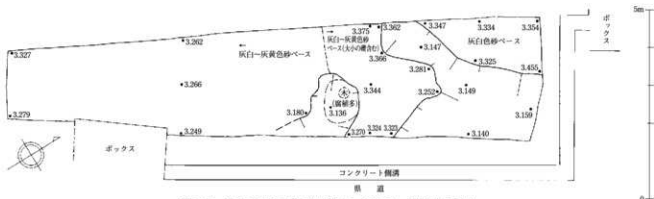
平成15年度、文化財課は出土品整理を埋文センターに委託し、企画部整理課が担当した。整理内容は遺物の記名・分類・接合・実測・トレースと遺構図トレースである。

平成16年度、文化財課は報告書刊行を埋文センターに委託し、調査部調査第2課が担当した。

第2節 調査の経過



第1図 調査区位置図 (S=1/2,000)



第2図 平成9年度調査区全体図 (S=1/100) (数字は標高)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

寺社今社遺跡・高照寺墓地は石川県珠洲市上戸町寺社地内に所在する。珠洲市は県の先端部、日本海に突出した能登半島の北東端に立地しており、北・東・南の三方は日本海に面し、西から南西方にかけては輪島市、能登町と接する。総面積は247.19km²、その内訳は山林約58%、田畑約35%、宅地約5%である。人口は20,474人(平成15年)である。

市周辺の地形は宝立山地、奥能登丘陵、海成段丘群、沖積低地に大別でき、市域の大部分を山地と丘陵が占めている。宝立山地は宝立山(標高468.6m)を最高峰とする、標高300~400mの比較的良く開析された低山性の小起伏山地であり、地質的には新第三紀の火山岩類と堆積岩からなる。奥能登丘陵は、宝立山地の東南側をとりまくように分布し、大部分が標高250m以下の丘陵地であり、地質的には新第三系の諸岩層から成っている。

海成段丘は第四紀更新世後期に形成された中位段丘とみられるものであり、段丘面の海拔高度は20~60mである。段丘面は薄い砂質もしくは砂礫質であるが、埋積谷部分ではやや厚い泥質の堆積物がみられ、半島先端部から市南部にかけての海側に連続的に分布する。河成段丘は若山川、鶴岡川にみられるが、特に若山川下流部に広く分布しており、高低2段にわたって発達している所が多い。低地は谷底平野・扇状地、海岸平野・三角州、砂丘がみられるが、分布の割合は低い。谷底平野・扇状地は若山川、竹中川、盤若川、鶴岡川の各河川流域に分布しており、その大部分を谷底平野が占める。海岸平野は砂丘もしくは砂洲の発達により形成された潟が埋積したものであり、海岸沿いに広く分布している。砂丘は若山川の東側と半島先端部に分布しており、浜(砂礫で覆われた平坦地)は極くわずかであるが存在している。

寺社今社遺跡は飯田湾と宝立山系丘陵の間に広がる南北に長い海岸平野に立地する。この海岸平野には海岸線と併走するように幾条かの砂丘が存在しており、その背後に広がる低湿地と、丘陵から飯田湾へ注ぐ流路によって入り組んだ凹地が形成され、点在する島状の微高地が生成されたと想定される。往時の集落はそのような場所を選定して営まれていたものと思われる。高照寺墓地は寺社今社遺跡の西側、丘陵裾部に立地する。近辺には県及び珠洲市の指定文化財である倒スギが存在する。

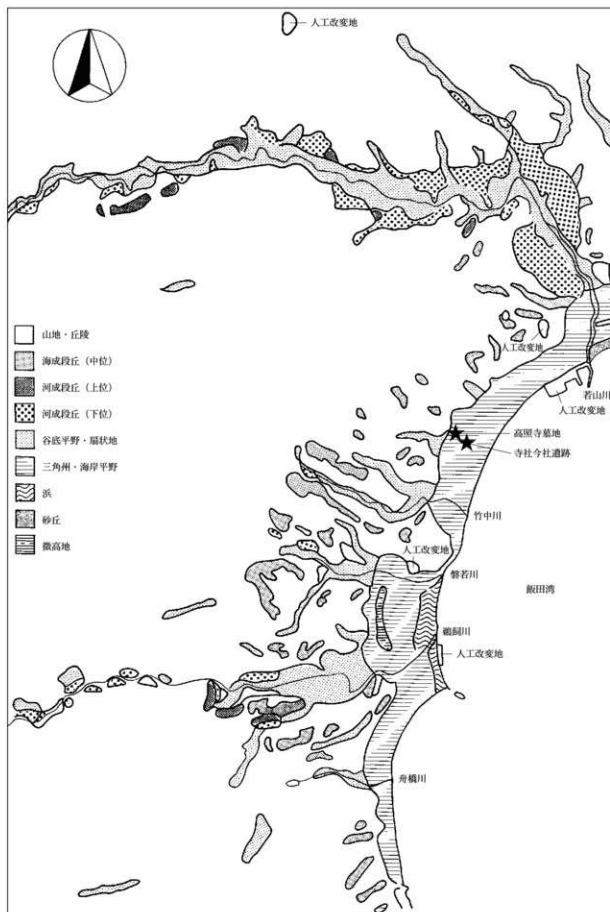
なお、地形図(第4図)は石川県農林水産部耕地整備課編「土地分類基本調査 宝立山・能登飯田・珠洲岬」を一部改変したものを掲載した。



第3図 遺跡の位置図

第2節 歴史的環境

珠洲の歴史において、人々の営みが確認できる最初の痕跡は、若山町井林や三崎町雲津から出土した尖頭器であり、これらは、旧石器時代晩期もしくは縄文時代草創期の所産と考えられている。その後、



第4図 遺跡周辺の地形図 (S=1/50,000)

高波ふるや遺跡が伏見川流域に縄文時代前期末から後期中葉にかけて存続し、貝塚も確認されている。鶴飼川流域では中期前葉から遺跡が形成され始めており、中期後葉まで存続していたと考えられる郷舎の前遺跡や中期後葉から後期前葉にかけての土器が出土している柏原垣内高瀬遺跡(73)等が所在する。盤若川上流の台地上には加護天池遺跡が立地しており、中期末葉から後期初頭にかけての土器が出土している。ほとんどの遺跡が丘陵地に立地しているが、縄文海進、弥生海退に移る転換期を経て、後期以降、沖積平野部にも進出し始める。後期中葉から後葉を主体とする鶴島どうがくち遺跡や晩期まで存続した北方山岸遺跡(19)等がある。

弥生時代は縄文時代、後の古墳時代比べて遺跡数は少なく、柳描文土器が出土した高波フルヤ遺跡の他は、大半が後期もしくは終末期に属する遺跡である。若山川流域の出田遺跡(3)や軽念遺跡、鶴飼川流域の柏原ミツハシ遺跡(67)等がある。

古墳時代に入り、弥生時代に伝わったとされる稲作の普及により水田開発に伴う水利権の利害関係を生み出し、それらをめぐり、有力な支配者層が地域統合を進めるなかで、やがて古墳群を築き始めるようになる。若山川左岸の丘陵部を中心に、総数150基確認されている。5世紀末頃から築造された永禪寺古墳群(36)は竹中川北岸に派生した丘陵上に分布しており、調査が行われた1号墳と2号墳は共に組合せ式箱型石棺が埋置されており、棺内からは刀剣類の他、胡籬(1号墳)が出土している。6世紀後半頃からは横穴群が急増し、現在、確認されているもので200基にも上る。これらは若山川、盤若川等の各河川によって形成された谷平野ごとにまとまって分布しており、その大半が飯田湾側に存在する。竹中川下流域の永禪寺横穴群(38)、盤若川下流域の谷崎横穴群(54)、珠洲地域の横穴分布の南限に位置する南黒丸、鶴島地域には南黒丸八幡B横穴群、南黒丸八幡A横穴群、鶴島横穴群が分布している。7世紀に入ると、竹中川と盤若川の間丘陵に大島古墳群(50)、大島南古墳群(49)が分布する。大島1号墳は横穴式石室を有し、石室内からは鍔金した斬金具を持つ刀、金環等が出土しており、4号墳からは金銅製双竜式環頭大刀が出土している。また大島南古墳群でも横穴式石室がみとめられ、須恵器や土師器が出土している。

古代に入ると、これまで越前国の一部であった珠洲郡は養老2年(718年)5月羽咋・能登・鳳至の三郡とともに能登国となり(『続日本紀』)、日置・草見・若優・大豆の四郷と余戸で構成される。そのうち、現地域の比定地がほぼ確実視されているのは若山川下流域とする若優郷だけであるが、その他も同様に、河川流域を中心に設置されていたと考えられ、若山川下流域には官衙関連遺跡と考えられている北方E遺跡(22)が存在している。また、古墳時代中頃から平安時代後期にかけての能登半島は日本海側有数の土器製塩地帯であり、珠洲地域においても、市北端部の三崎町周辺を中心に製塩遺跡が分布する。森腰遺跡、宇治役場裏遺跡、鶴島遺跡等が知られる。

中世は承久3年(1221年)作成の『国中四郡庄郷保公田々数目録』によれば、珠洲地域は若山庄・珠正院・蔵見村・高屋浦・方上保等の庄・院・村の所領となっており、特に若山庄は能登国最大規模をほこっていた。若山庄の成立は11世紀末に能登国司に着任した源俊兼とその子季兼が私領化した土地を、康治2年(1143年)、崇徳上皇の後藤原聖子に寄進したことによる。その寄進状によると「南は珠正院真脇村、北は同院八条袋、町野院境山、東は海をそれぞれ限る」とあり、庄域は八条袋の比定地については諸説があるため断定はできないが、現在の珠洲市域と南隣の鳳珠郡能登町(旧：珠洲郡内浦町)のほぼ全域を比定できると考えられている。中世後期には、この若山庄は松波川流域の木郎郷、鶴飼川流域の直郷、若山川下流域の飯田郷、若山川上・中流域の若山郷、日本海沿岸に面した西海浦の四郷一浦から構成されていたとされる。

中世の珠洲地域で特筆される物の一つとして珠洲焼が知られ、若山郷等の各郷が深く関わっていたと考

えられている。庄域には現在確認されている珠洲焼窯跡の大半が分布しており、庄園領家日野家の祈禱所である法住寺や白山神社が所在し、庄政所が置かれていたと思われる直郷では、法住寺寺域内から窯跡が確認されており、境内の林木伐採を禁止する旨を出して、燃料供給源を確保していることなどから、珠洲焼の生産や経営にあっていたことは想像に難くない。法住寺以外の地域でも、窯跡の所在するところには中世有力寺院が存在しており、それらが、何らかの形で生産・流通を担っていたのであろう。窯跡は市全域に散在しており、鶴岡川上流域に西方寺窯跡群、鳥屋尾垣内窯跡、柏原郷の前窯跡群、盤若川中流域には法住寺窯跡群、下流域には春日野大島窯跡群(55)、海岸線から約2.5km内陸部には最古の窯跡である寺社カメワリ坂窯跡群(41)、能登半島北東部には寺家黒煙窯跡群、大屋ヒヤマ窯跡群、外浦側に唯一所在する外浦馬繰亀ヶ谷窯跡がある。

集落遺跡として、南丸遺跡では13～14世紀代の掘立柱建物跡、井戸跡が多数確認され、柏原A遺跡(71)では14世紀を中心に集落が展開しており、また、飯田町遺跡(6)、柏原ミツハシ遺跡(67)、柏原ジツチン遺跡(66)、鶴島遺跡等が知られる他、中世城郭である飯田城山遺跡(5)、正院川尻城跡がある。

既往の調査

寺社今社遺跡は平成9(1997)年度に石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行っている。珠洲道路の改良工事に伴うものであり、上戸保育所の前、現道の北(山)側に拡幅される道路部分が調査の対象となった。調査区の西西部については上戸保育所の出入口にあたり調査が不可能であったため、調査終了後の平成10年2月23日に石川県教育委員会が工事立会いで対応している。

調査は道路脇に幅3m前後の調査区を設定して行った(第2図)。その結果、地表下約1m・標高約3.3mで砂質の地山と腐植質土が堆積する複数の落ち込みを検出した。調査区内からは土師器・須恵器・珠洲焼・磁器が若干採集されているが、小破片で図化できなかった。

遺構・遺物は希薄な状況であったが、地形的にも海岸近くに展開する低地に接近しているものと推定されることから、遺跡の縁辺部と理解されよう。

参考文献

- | | | |
|---------------|------|-------------------------|
| 石川県教育委員会 | 1992 | 『石川県遺跡地図』 |
| 石川県農林水産部耕地整備課 | 1995 | 『土地分類基本調査 宝立山・能登飯田・珠洲町』 |
| 石川県立博物館編 | 2000 | 『能登最大の中世荘園 若山荘を歩く』 |
| 石川県立埋蔵文化財センター | 1993 | 『大高南古墳群発掘調査』 |
| 石川県立埋蔵文化財センター | 1995 | 『出田遺跡』 |
| 石川県立埋蔵文化財センター | 1998 | 『石川県立埋蔵文化財センター年報』第19号 |
| 珠洲市史編纂専門委員会編 | 1976 | 『珠洲市史第1巻』自然・考古・古代 |
| 珠洲市史編纂専門委員会編 | 1978 | 『珠洲市史第2巻』中世・寺院・歴史考古 |
| 珠洲市史編纂専門委員会編 | 1979 | 『珠洲市史第4巻』神社・製塩・民俗 |
| 珠洲市史編纂専門委員会編 | 1980 | 『珠洲市史第6巻』通史・個別研究 |
| 吉岡康暢 | 1994 | 『中世須恵器の研究』 |



第5図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第2節 歴史的環境

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	年代	出土品	備考
1	010487 野方石町古墳遺跡	佐賀市野方町	砂土	縄文、中世	打製石斧、海貝
2	010496 山田古墳遺跡	佐賀市山田町	砂土	縄文、土器	縄文土器、土器
3	010495 山田遺跡	佐賀市山田町	砂土	弥生、土器	1992年石川町埋蔵文化財センター発掘調査。 枝系弓矢鏃まである。副葬品。 副葬品。
4	010494 高田1号横穴	佐賀市山田町	古墳	古墳	1992年石川町埋蔵文化財センター発掘調査。 副葬品。
5	010493 高田山遺跡	佐賀市山田町	山跡	弥生	副葬品。
6	010492 高田山遺跡	佐賀市山田町	平地	中世、平安	1999年石川町埋蔵文化財センター発掘調査。
7	010491 北方大門遺跡	佐賀市山田町	平地	縄文	磨製石斧、土器
8	010099 山田古墳群	佐賀市山田町	平地	弥生	1997年佐賀県発見調査。1999年山田町埋蔵文化財センター発掘調査。
9	010096 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
10	010097 上野塚古墳群	佐賀市山田町	丘陵	古墳	円筒埴輪。
11	010098 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	土器
12	010490 北方遺跡	佐賀市山田町	平地	弥生、中世	磨製石斧、土器
13	010252 北方C遺跡	佐賀市山田町	平地	弥生、平安	弥生土器、土器
14	010251 北方B遺跡	佐賀市山田町	平地	弥生、平安	弥生土器、土器
15	010249 北方A遺跡	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
16	010095 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
17	010094 あまき古墳群	佐賀市山田町	丘陵	古墳	磨製石斧、土器
18	010093 あまき古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
19	010092 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
20	010091 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
21	010090 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
22	010089 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
23	010088 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
24	010087 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
25	010086 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
26	010085 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
27	010084 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
28	010083 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
29	010082 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
30	010081 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
31	010080 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
32	010079 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
33	010078 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
34	010077 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
35	010076 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
36	010075 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
37	010074 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
38	010073 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
39	010072 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
40	010071 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
41	010070 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
42	010069 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
43	010068 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
44	010067 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
45	010066 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
46	010065 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
47	010064 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
48	010063 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
49	010062 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
50	010061 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
51	010060 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
52	010059 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
53	010058 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
54	010057 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
55	010056 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
56	010055 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
57	010054 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
58	010053 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
59	010052 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
60	010051 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
61	010050 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
62	010049 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
63	010048 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
64	010047 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
65	010046 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
66	010045 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
67	010044 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
68	010043 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
69	010042 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
70	010041 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
71	010040 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
72	010039 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器
73	010038 北方古墳群	佐賀市山田町	平地	古墳	磨製石斧、土器

第3章 寺社今社遺跡

第1節 調査の概要

排水路敷設箇所中心上に2m幅の調査区を設定した。調査区の形状はT字状を呈しており、西側をA区、東側の南北に長い調査区をB区とした。各調査区のセンターライン上に10m間隔で杭を打ち、A4区・B24区までグリッドを設定した。A区は杭の東側、B区は杭の南側でグリッド名を呼称し、A4区とB9区は隣接する。現況の標高は4.5～5.2m、遺構検出面の標高は4.1～5.1mで西から東へ傾斜する。地山は珪藻土ブロックを微量に含む明黄褐色粗砂層であった。遺構埋土は褐色粗砂層を基調とする。耕地整理による影響で遺物包含層である暗灰褐色粗砂層は薄く、部分的にしか確認できなかった。A3区杭周辺は表土除去の際、部分的に炭化物を含む焦土面が薄く分布しており、製塩土器の細片が出土している。

掘立柱建物(SB)5棟、柵列(SA)1列、土坑(SK)2基、性格不明遺構(SX)5基、ピット(P)・溝(SD)多数を検出した。主な時期は古代である。B22区から南は遺構が希薄であり、遺跡の南端と判断した。遺物の大半は遺構検出面及び包含層からの出土であり、B18区で多い傾向が認められた。

第2節 遺構

ピットと溝は遺構計測表にまとめた。検出高は掘方最上位の標高値を示す。規模は円・不整形を長軸×短軸、方形を長辺×短辺として計測し、欠番は表から除外した。新旧関係は矢印で示し、例えばP1がSK1を切る場合、SK1→P1と表している。

掘立柱建物

- SB1 (第8図) B1区に位置する。総柱建物で、桁行2間・梁行2間を確認した。
SB2 (第8図) B3区に位置する。側柱建物で、桁行2間・梁行1間を確認した。
SB3 (第9図) B5～6区に位置する。側柱建物で、桁行3間・梁行1間を確認した。
SB4 (第10図) B8区に位置する。側柱建物で、桁行2間・梁行1間を確認した。
SB5 (第13図) B18～19区に位置する。側柱建物で、桁行1間・梁行1間を確認した。
- すべて南北方向に軸をもつ。

柵列・土坑

- SA1 (第12図) B15～16区に位置する。1.7mの間隔でピットが構築されていた。
SK1 (第9図) B4区に位置し、SX2に切られる。南に張り出す楕円形を呈すると思われる。西側はピット状の遺構に切られており不明だが、立ち上がりは緩い。検出高4.33m・長軸1.8m以上・張り出し部長軸73cm・深さ14cmを測る。埋土は灰褐色～暗灰褐色粗砂を基調とする。また底面中央部に楕円形のピットを検出した。検出高4.19m・長軸1.2m・短軸73cmを測り、埋土は暗灰色シルトである。土質が異なることから、ピットを掘り広げてからSK1を構築した可能性がある。須恵器の裏(1)が出土している。



第6図 遺構配置図 (S-1/200)

SK2 (第13図) B20区に位置し、隣接する畝溝状の遺構を切る。円形を呈し、検出高4.15m・長軸1.55mを測る。埋土は灰色粗砂を基調とするが、他の遺構と比べて土質的にしまりがなく、新しい印象を受けた。遺構上面で長さ1.1m・幅30cmの丸太を確認している。畝溝状遺構は出土遺物から古代と判断されることから、それ以降の時期と考えられる。

性格不明遺構

SX1 (第7図) A2～3区に位置する。先述した薄い焦土範囲である。3区杭の東2m付近で肩をかろうじて検出しているが、形状の特定には至らなかった。検出高5mを測り、下端との比高差は3～5cmである。埋土は暗灰色粗砂であり、炭化物を含む。包含層と土質に近い印象を受けた。須恵器の蓋(3)・無台杯(8)、土師器の椀(11)・底部(15・16)が出土した。製塩土器と思われる体部片も2点出土しており、接合痕が明瞭に認められた。

SX2 (第9図) B4区に位置し、**SK1**を切る。調査区の西側にのびており形状は不明である。検出高4.29m・最大幅1.05m・深さ11cmを測る。埋土は灰褐色粗砂を基調とする。また底面中央で隅丸長方形を呈する土坑を検出した。検出高4.15m・長辺1.51m・短辺65cm・深さ7cmを測る。埋土は同様であるが、若干地山を含む割合が高いように思われた。断面図や土質から判断して、この土坑の南の上端から**SX2**の北の上端までは底面に凹凸のある同一の遺構である可能性が高い。なお調査区壁土層番号4は平面図上で溝状を呈する遺構の埋土であり、この土から比較的多くの土器が出土している。

SX3 (第10図) B8区に位置し、**P15**を切る。調査区の東側にのびており形状は不詳だが、確認できた平面形は「コ」の字状を呈する。検出高4.38m・溝部最大幅60cm・深さ17cmを測る。埋土は濁褐色粗砂を基調とする。**P15**は柱穴状の掘方・断面をしていたが、これに対応する柱穴は検出できなかった。周辺にはそのようなピットが多く、掘立柱建物を構成する可能性がある。

SX4 (第10図) B9区に位置する。掘りすぎているため形状は不詳だが、遺構検出面では溝状を呈していたと記憶している。**P27**に隣接する溝状の遺構が**SX4**の南の上端である。検出高4.42mを測り、下端との比高差は5～6cmである。埋土は濁褐色粗砂を基調とする。遺構ではなく、低くなっていた落ち込み面に包含層が堆積しただけという可能性もある。

SX5 (第13図) B22区に位置する。調査区の西側にのびており形状は不詳だが、確認できた平面形は南に張り出す溝状を呈する。検出高4.12m・張り出し部長軸1.28m・深さ19cmを測る。埋土は濁褐色粗砂を基調とする。

ピット・溝

第10図B10区杭近辺の破線遺構は、平面図上では**SD11**を切っているが実際は逆であり、また観察表では遺物報告番号9の土師器椀はこの遺構から出土している。**P14**は欠番であり、この遺構に付すこともできたが、記録の混乱を招く可能性があるため修正しなかった。

第3節 遺物

遺構出土遺物 (第14図)

- 1は須恵器の裏である。2は甕器系の裏で、外面には格子状のタタキが施されている。
- 3～5は須恵器の蓋である。3は薄く扁平なつまみをもち、天井部外面に平坦面が形成されている。

口縁部との境は不明瞭で、口縁端部はナデによって面が形成される。天井部から口縁部の外面に降灰が認められた。天井部内面にヘラ記号が施され、2条の筋を確認できる。4は3と同様な器形を呈すると思われるが若干厚手で、天井部から口縁部にかけての境が不明瞭である。天井部内面には墨痕が認められ、硯に転用されていた可能性が高い。5の口縁端部は外側へ若干張り出しており、かえりが受けより短い。3・4より古手の様相を呈する。

6・7は須恵器の有台杯である。6は腰に丸みを帯び、体部が外傾気味に立ち上がる。底部の器壁は体部よりも厚く、高台はしっかりと接地する。内外面に漆を使用した痕跡が認められた。7も6と同様な器形であるが、器壁の厚さはほぼ均一である。底部外面に墨書が確認できる。8は無台杯である。体部は開き気味に立ち上がり、底部が外側にやや突出する。器種は異なるが6・7より新手の様相を呈する。

9～11は非ロクロの土師器碗である。外面は体部下半にケズリが施され、口縁端部付近はヨコナデによって若干窪みができており、そのあとに赤彩が施される。また内面には密なミガキと黒色処理が施されることが多く、黒色処理は口縁端部付近の外面まで及ぶことがある。9は体部から底部の境目の有無が不明瞭であるが、10はその度合いが強いように見受けられた。9・10は体部が丸みをもって立ち上がるが、11はやや外傾気味にまっすぐ立ち上がる。12は土師器碗である。磨耗が顕著であり、体部外面の指頭圧痕がかろうじて観察できた程度である。内外面とも被熱している。口縁端部は9～11と同じようにヨコナデが施されており、面取りする仕口であった。13は須恵器の無台杯と思われ、焼成が不良である。

14は土師器の甕である。外面は剥離・磨耗・被熱が顕著である。体部内面上半はヨコナデ、そこから底部にかけては斜めにナデが施されており、体部と底部に1箇所ずつ接合痕が認められた。胎土は脆く砂粒の大きさと多さが目立つ。15～17は土師器の底部で平底である。器壁は厚いが被熱が顕著であり、製塩土器の可能性が高い。18は手づくね土器である。内外面ともに指頭圧痕が施され、外面の一部に被熱痕が認められた。

遺構検出面出土遺物（第15図）

19～21は須恵器の蓋である。19のつまみはやや扁平だが、頂部が若干盛り上がる。天井部外面に平坦面が形成されており、口縁部に一部ゆがみが生じている。口縁端部は器壁を減しながら内屈させており、折り曲げたような印象を受ける。天井部から口縁部の外面に降灰が認められた。天井部内面にヘラ記号が施され、1条の筋を確認できる。20は天井部が若干丸みを帯びながら口縁端部に至る。天井部外面に墨書が認められた。21は天井部外面に平坦面が形成されているが、比較的口縁部との境界はわかりやすい。口縁端部は若干外反している。

22～25は非ロクロ土師器の碗である。基本的な調整は先述したとおりだが、より薄手の印象を受ける。22の外面調整はミガキとなっているが実際はケズリである。24は他の土師器碗よりも器高が高く深身を呈し、口縁端部も緩く外反している。

26～28は須恵器の有台杯である。腰に丸みを帯び、体部は外傾気味に立ち上がる。26の高台は踏ん張るように接地し、口縁端部で器壁を減じる傾向が認められた。27の高台は外端で接地する。28の高台は比較的幅広で、底部の器壁が厚い。29～32は無台杯である。29の体・底部の境はナデによる面が形成されている。体部は直立気味に立ち上がり、深身を呈する。30～32は体部が外傾気味に立ち上がる。31の底部外面には回転ヘラ切りの痕跡がはっきりと確認できる。32の器壁は比較的薄く、底部は平坦で体部との境も明瞭である。33は須恵器の盤である。体部は外傾気味に立ち上がり、ロクロヒダが目立つ。

34・35は土師器の底部で平底である。底部外面に線状の筋が認められた。35は被熱の度合いが強く、図面ではわからないが底部内面に指頭圧痕が施されている。36は珠洲焼の甕である。口縁部内面に接合

痕を確認できる。口縁端部はナデによって面が形成される。遺構検出面而出土した他の土器とは明らかに時期が異なっており、取上げの際に間違えたまま遺物整理を進めてしまったものと考えられる。

包含層出土遺物 (第16~17図)

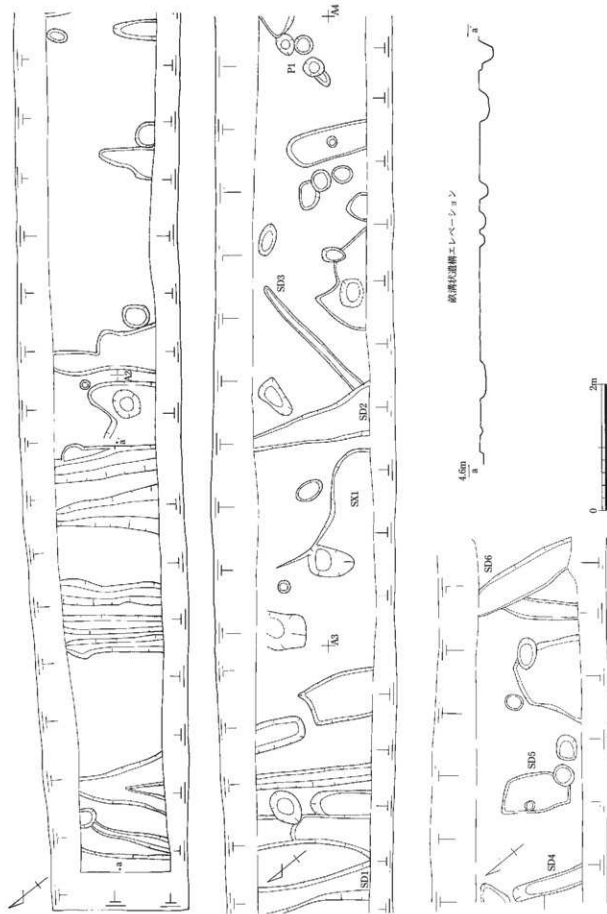
37~41は須恵器の蓋である。37~39の天井部外面はケズリによって平坦面が形成されている。37は薄手で、天井部から口縁端部にかけてロクロヒダによる凹凸が明瞭に観察できる。口縁端部に短いかえりをもつ。38は比較的厚手で、天井部外面のケズリによる面形成はさほど目立たない。口縁端部のかえりは短く鋭い。39の天井部と口縁部との境は狭い幅で面取りされており、口縁端部は折り返される。40は宝珠形つまみをもち、口縁部に一部ゆがみを生じている。41の口縁部は折り曲げられて端部が長く垂下しており、天井部と口縁部との境は狭い幅で面取りされている。出土した他の蓋と形状的に異質である。

42~44は須恵器の無台杯である。42は底部外面に「右万呂」と墨書されており、中央が内側に若干窪む。43は底部外面にヘラ記号が施され、3条の筋を確認できる。石英・長石の混じる割合が少くサラサラした質感であり、他の出土土器と胎土的に異質である。45の底部外面には静止糸切りの痕跡が認められる。底部中央は器壁が薄く、外面に溶着物が付着している。46~50は有台杯である。46・49の体部は直立気味に立ち上がるが、47・48・50は開き気味に立ち上がる。46の高台は踏ん張るように接地する。底部外面にはヘラ記号による4条の筋が高台側に寄って格子状に施されている。47は高台の内端と底部中央で接地している。底部と体部の境が不明瞭で、体部は内湾しながら丸みをもって立ち上がる。底部中央と口縁端部で若干肥厚しており、口径は16.4cmと比較的大きい。高台が一部はがれており、接合痕を明瞭に確認できる。48の口縁端部は緩く外反している。49は腰の張りが強い。50は底部内側の凹凸が顕著で、底部中央は薄い。

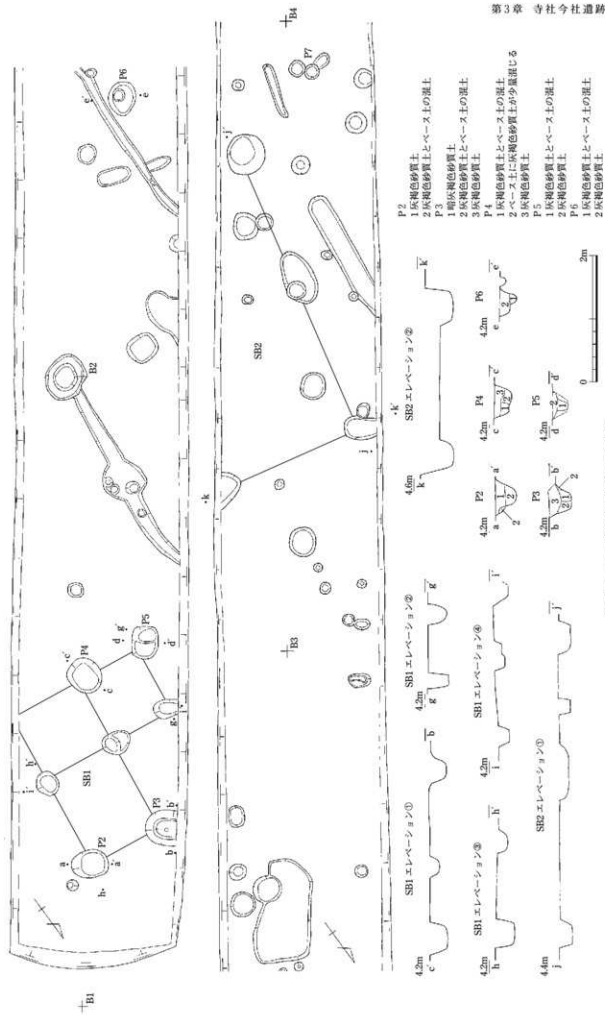
51~53は非ロクロ土師器の椀である。22~25のように薄手ではなく、どちらかといえば9~11のような比較的厚手のタイプに近い。基本的な調整は先述したとおりである。54は土師器の裏である。口縁部は「く」の字状を呈し、外面に工具痕を確認できる。口縁部内面に横方向のハケ、胴部から頸部の外面に縦方向のハケが施されている。55は製塩土器の底部で尖底棒状タイプである。

56~59は珠洲焼で、56・58は甕である。56の口縁端部はつまみ出すようにして丸く仕上げられており、36よりタタキの単位が細かい。58の口縁端部はつまみ出すようにして横にのび、軽めに面取りされる。欠損部が目立つ。57は鉢鉢である。底部外面の静止糸切り痕は磨耗していて確認しづらく、使用頻度の高さが窺われる。幅2.5cmで12本の卸目が施されている。体部外面の一部にナデによる横皺が認められた。59は水注である。取手が貼り付いており、その周辺に幅1cmで3本の波状文が1周するようにして施される。体部下半には幅1.6cmで5本のタタキが切り合うようにして施されており、体部上半の波状文のような規則性は認められなかった。注ぎ口の径は4mmを測る。

60・61は曲物の底板である。60の側面には5箇所の釘痕が認められ、61の表面は一部焦げていた。62は須恵器の甕である。体部外面は斜方向のケズリを消すようにしてロクロナデが施されている。底部から体部にかけての内面にはナデによる凹凸が明瞭に確認でき、高台の内側で接地する。



第7図 A1~A4区 遺構平面図 (S=1/60)



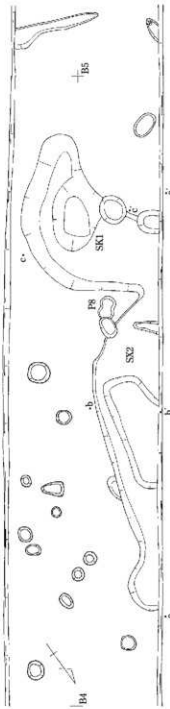
第8図 B1～3区 遺構平面図 (S-1/60)



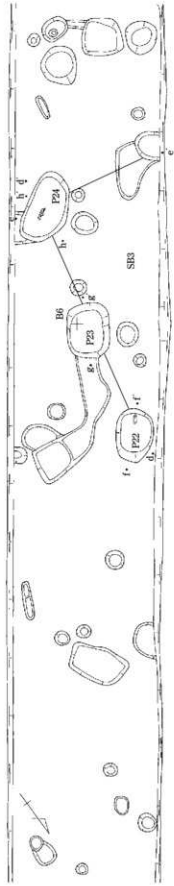
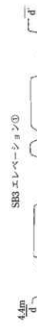
- SK1
 1 明灰色砂質土
 2 明灰褐色砂質土
 3 明灰褐色砂質土
 4 灰褐色砂質土
 5 明灰シルト (上はみねの層)



- SK2
 1 明灰色砂質土
 2 灰褐色砂質土 (ベース土多く含む)



- 溝床(壁土層)
 1 壁土
 2 明灰褐色砂質土(床土)
 3 灰褐色砂質土
 4 明灰褐色砂質土(土層含む)
 5 明灰砂質土
 6 明灰褐色砂質土



- SK1エレベーション②
 1 明灰褐色砂質土
 2 明灰褐色砂質土 (より用いる)
 3 灰褐色砂質土



- P22
 1 明灰褐色砂質土



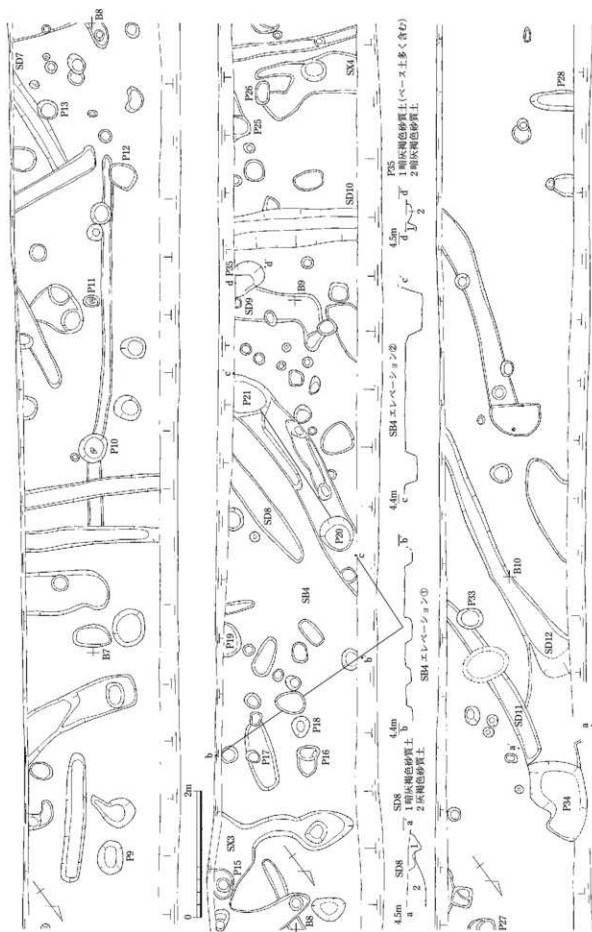
- P23
 1 明灰褐色砂質土
 2 明灰褐色砂質土 (より用いる)
 3 灰褐色砂質土



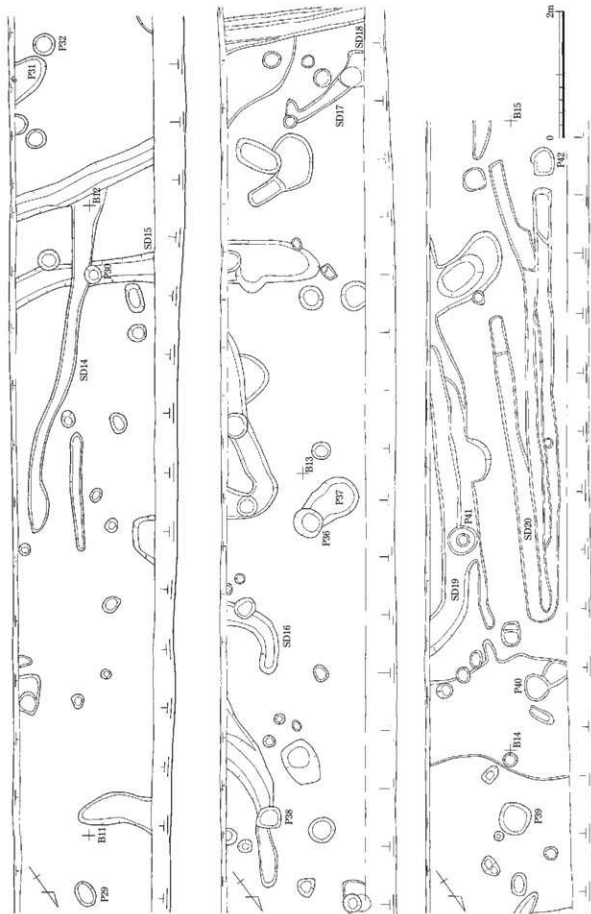
- P24
 1 灰褐色砂質土



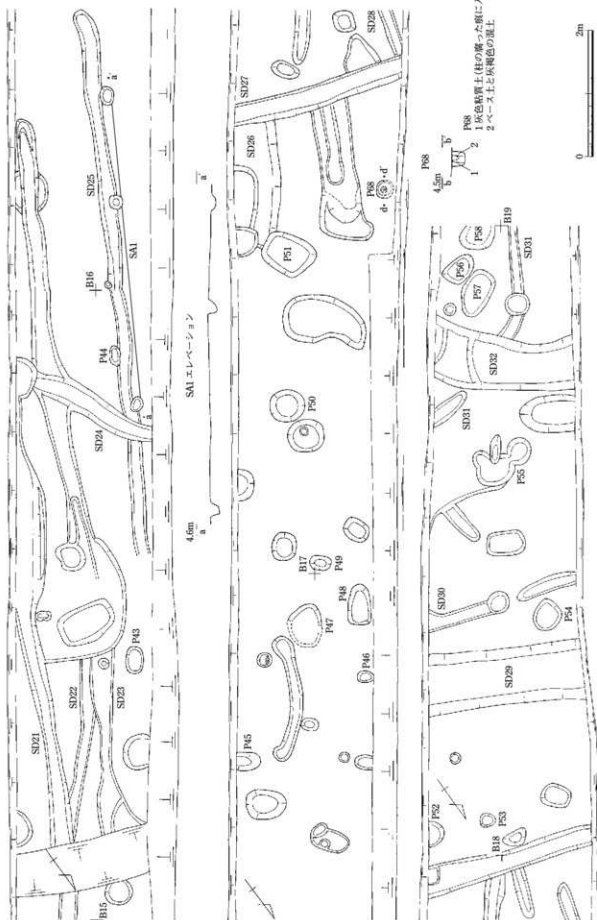
第9図 B4～6区 溝床実測図 (S=1/100)



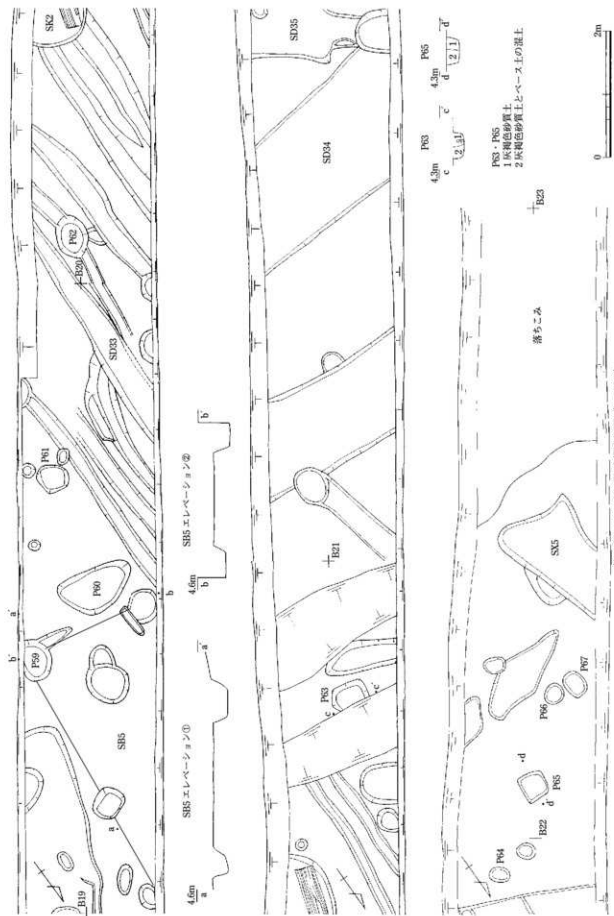
第10図 B6～10区 遺構実測図 (S-1/80)



第11圖 B11~14区 遺構実測図 (S-1/60)



第12図 B15~18区 遺構実測図 (S-1/60)



第138 図 B19-22区 遺構実測図 (S-1/60)

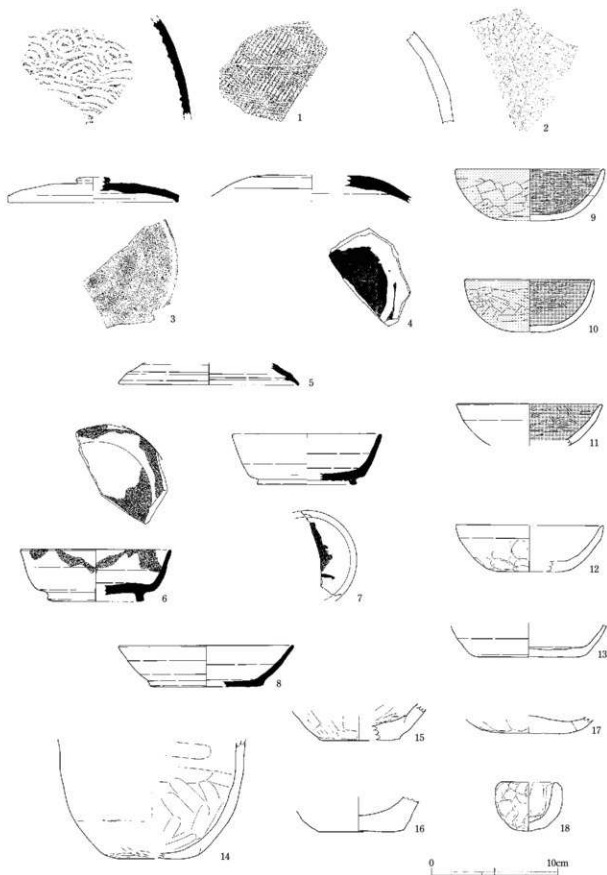
第2表 遺構計測表(ビット)

番号	位置	検出高(m)	形状	規模(cm)	深さ(cm)	埋土	切合い等
1	A 3区	5.07	円	35×30	13	褐灰	
2	B 1区	4.09	楕円	60×45	32	褐灰	SB 1柱穴
3	B 1区	4.13	楕円	(50)×55	28	褐灰	SB 1柱穴
4	B 1区	4.12	隅丸方	65×48	27	濶層灰	SB 1柱穴
5	B 1区	4.15	隅丸方	50×42	26	褐灰	SB 1柱穴
6	B 2区	4.21	楕円	55×43	24	暗灰褐	
7	B 3区	4.77	隅丸方	25×24	10	褐灰	
8	B 4区	4.29	瓢箪	40×25	10	濶層灰	
9	B 6区	4.23	楕円	53×40	11	暗灰褐	
10	B 7区	4.29	円	50×43	30	褐灰	木遺存
11	B 7区	4.29	楕円	35×17	15	褐灰	木遺存
12	B 7区	4.33	隅丸方	50×40	24	褐灰	
13	B 7区	4.18	円	32×30	4	褐灰	→ SD 7
15	B 8区	4.35	楕円	50×31	24	濶層灰	→ SX 3
16	B 8区	4.28	隅丸方	50×31	8	褐灰	
17	B 8区	4.31	円	24×19	18	濶層灰	
18	B 8区	4.34	円	34×29	18	褐灰	SB 4柱穴?
19	B 8区	4.34	円?	55×(23)	3	褐灰	
20	B 8区	4.28	円	56×54	19	褐灰	SB 4柱穴
21	B 8区	4.28	円?	68×(57)	25	褐灰	SB 4柱穴
22	B 5区	4.3	隅丸方	83×53	26	暗灰褐	SB 3柱穴
23	B 5→6区	4.33	隅丸方	86×68	31	褐灰	SB 3柱穴
24	B 6区	4.36	隅丸長方	113×68	30	暗層灰	SB 3柱穴、木遺存
25	B 9区	4.34	方形	(65)×(30)	25	濶層灰	→ SX 4
26	B 9区	4.36	隅丸方	35×24	19	濶層灰	→ SX 4
27	B 9区	4.42	隅丸方	43×34	20	褐灰	
28	B10区	4.45	楕円	(70)×30	12	褐灰	
29	B10区	4.43	円	43×30	11	褐灰	
30	B11区	4.35	円	28×25	14	灰	→ SDH・15
31	B12区	4.29	楕円?	(70)×52	15	暗灰褐	木遺存
32	B12区	4.3	円	35×35	9	褐灰	
33	B 9区	4.34	円	40×33	22	暗灰褐	→ SD11
34	B 9区	4.42	不整隅丸方	85×78	42	褐灰	須恵器出土(7)
35	B 9区	4.39	脚円方形?	(50)×40	17	暗灰褐	→ SD 9
36	B12区	4.24	円	48×43	14	暗灰褐	→ P37
37	B12区	4.24	楕円?	(86)×61	20	褐灰	→ P36
38	B12区	4.35	隅丸方	39×32	9	暗灰褐	
39	B13区	4.44	隅丸方	48×43	4	褐灰	
40	B14区	4.35	円	44×41	34	暗層灰	
41	B14区	4.34	円	46×45	24	褐灰	→ SD19
42	B14区	4.33	隅丸方	45×38	25	褐灰	
43	B15区	4.33	隅丸方	35×32	16	褐灰	
44	B15区	4.38	楕円	40×20	18	灰	→ SD25
45	B16区	4.86	楕円?	(38)×26	11	褐灰	
46	B16区	4.93	円	25×18	15	褐灰	須恵器出土(5)
47	B16区	4.88	不整円	69×54	24	褐灰	
48	B16区	4.88	隅丸方	60×40	14	褐灰	
49	B17区	4.81	円	45×45	12	褐灰	
50	B17区	4.62	円	56×51	4	褐灰	
51	B17区	4.36	隅丸方	82×50	27	褐灰	→ SD26
52	B18区	4.44	円?	50×(30)	19	褐灰	
53	B18区	4.44	円	28×25	25	褐灰	
54	B18区	4.45	隅丸方	55×50	19	褐灰	
55	B18区	4.39	不整	124×80	16	褐灰	

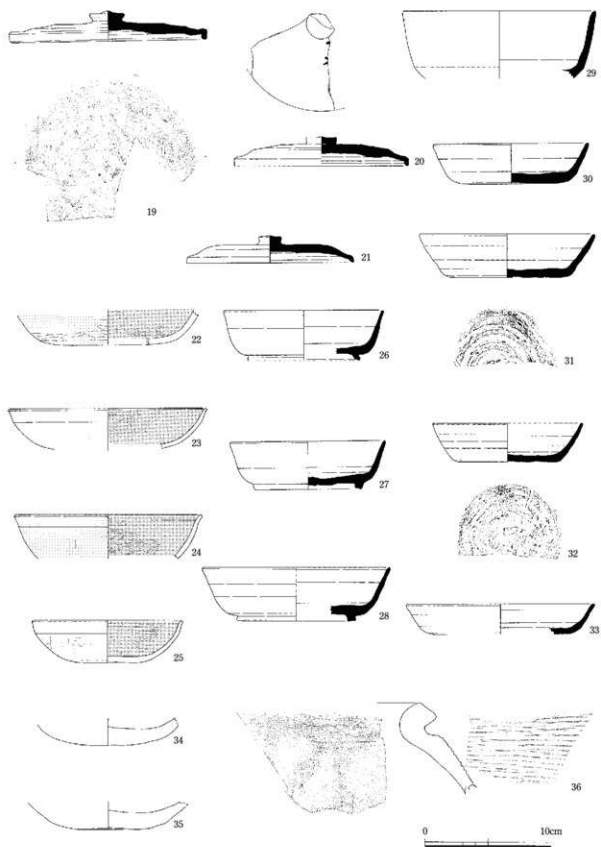
番号	位置	検出高(m)	形状	規模(cm)	深さ(cm)	埋土	切合い等
56	B18区	4.35	隅丸方	70×45	20	裾灰	
57	B18区	4.29	隅丸方	90×50	8	濡灰	
58	B18区	4.35	隅丸方	55×50	32	裾灰	
59	B19区	4.38	円	69×52	23	裾灰	SB 5柱穴
60	B19区	4.4	不整楕円	110×66	18	濡灰	
61	B19区	4.41	隅丸方	48×45	20	裾灰	
62	B20区	4.19	楕円	70×49	25	暗灰裾	
63	B20区	4.09	隅丸方	50×(35)	19	裾灰	木遺存
64	B21区	4.19	円	30×25	7	灰	
65	B22区	4.2	隅丸方	45×40	20	裾灰	
66	B22区	4.17	円	30×30	24	暗灰裾	
67	B22区	4.18	隅丸方	40×30	22	暗灰	
68	B17区	4.36	円	28×27	24	灰	木遺存

第3表 遺構計測表(溝)

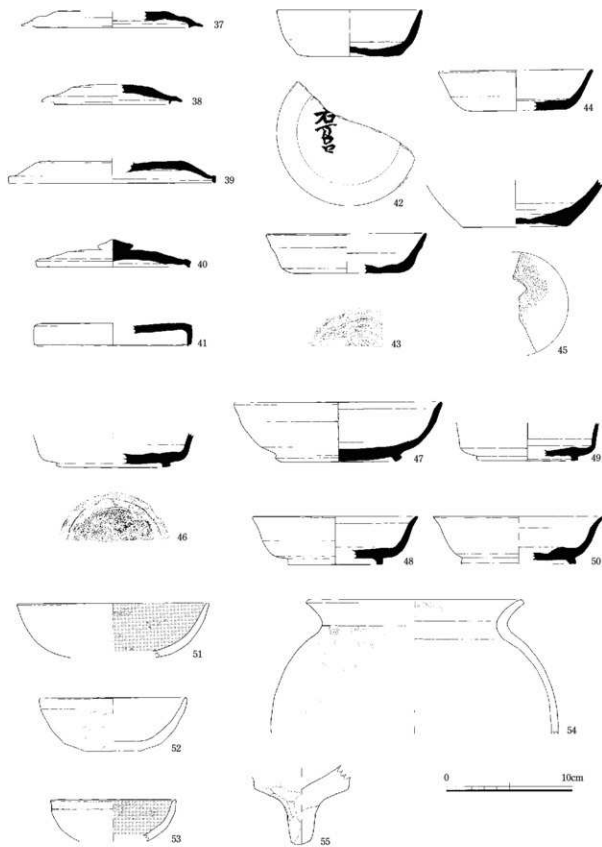
番号	位置	検出高(m)	幅(cm)	深さ(cm)	埋土	切合い等
1	A 2区	4.48	60	18	裾灰	
2	A 3区	5.09	75	11	裾灰	← SD 3
3	A 3区	5.1	15	8	裾灰	→ SD 2
4	A 4区	5.08	28	9	裾灰	
5	A 4区	5.09	62	6	裾灰	浅い土坑状
6	A4・B9区	5.05	56	23	裾灰	SD12、土師器出土(14)
7	B 7区	4.36	31	18	裾灰	→ P13
8	B 8区	4.33	37	8	濡灰	
9	B 8区	4.4	45	7	裾灰	← P35
10	B 9区	4.38	63	15	裾灰	
11	B 9区	4.42	30	16	裾灰	土師器出土(9・13)
12	A4・B9区	5.05	56	23	裾灰	SD 6、土師器出土(10・12)
14	B11区	4.38	43	12	裾灰	← SD15、→ P30、須恵器出土(6)
15	B11区	4.32	42	10	裾灰	→ P30・SD11
16	B12区	4.3	28	13	裾灰	
17	B13区	4.4	20	6	裾灰	
18	B13区	4.42	53	17	裾灰	
19	B14区	4.41	59	10	裾灰	← P41
20	B14区	4.39	23	10	裾灰	
21	B15区	4.42	35	18	裾灰	← SD22
22	B15区	4.36	20	6	裾灰	→ SD21・23
23	B15区	4.4	37	13	裾灰	← SD22、→ SD24
24	B15区	4.34	47	17	裾灰	← SD23・25
25	B15～16区	4.37	29	8	裾灰	→ P44
26	B17区	4.36	41	13	裾灰	→ P51・SD27
27	B17区	4.38	37	10	暗灰裾	← SD26・28
28	B17区	4.38	22	7	裾灰	→ SD27
29	B18区	4.46	88	27	裾灰	須恵器(3)、手づくね(18)出土
30	B18区	4.47	22	18	裾灰	
31	B18～19区	4.38	18	12	濡灰	→ SD32
32	B18区	4.38	90	20	濡灰	← SD31
33	B19～20区	4.41	53	16	裾灰	
34	B21区	4.16	179	8	淡青灰	
35	B21区	4.17	88	9	淡青灰	



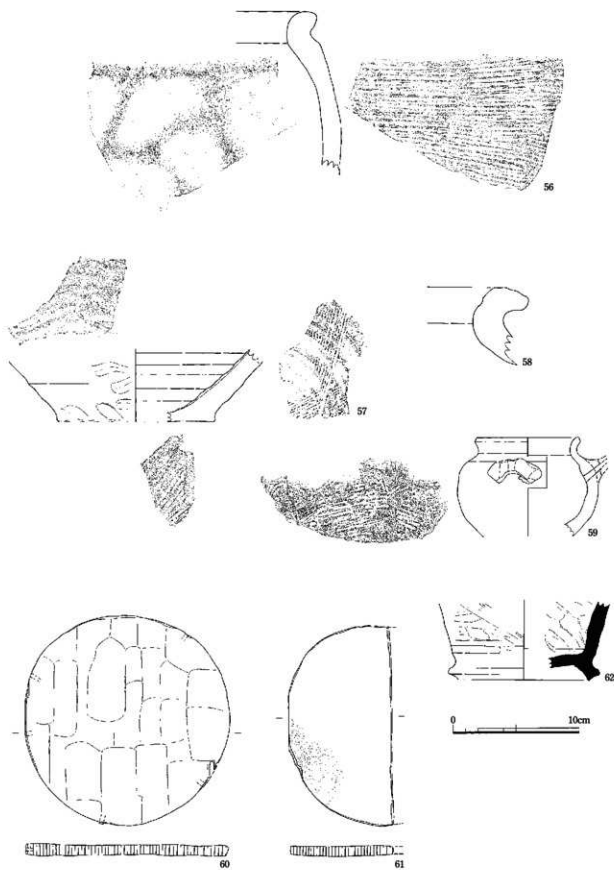
第14図 遺構出土遺物実測図 (S-1/3)



第15图 遗構検出面出土遺物実測図 (S=1/3)



第16図 包含層出土遺物実測図 (S=1/3)



第17图 包含层出土器物实测图 (S=1/3)

第4章 高照寺墓地

第1節 調査の概要

排水路敷設箇所中心上に2m幅の調査区を設定した。調査区のセンターライン上に10m間隔で実測用の杭を打ったが、グリッドによる区割りは行わなかった。現況の標高は5.1~5.6m、遺構検出面の標高は4.7~5.5mで西から東へ傾斜する。地山は珪藻土ブロックを微量に含む明黄褐色粗砂層であった。耕地整理による影響で遺物包含層である暗灰褐色粗砂層は薄く、部分的にしか確認できなかった。

鞍部とピット列を検出した。遺物は全て鞍部ないし包含層から出土しており、時期は中世である。

第2節 遺構と遺物

遺 構 (第18図)

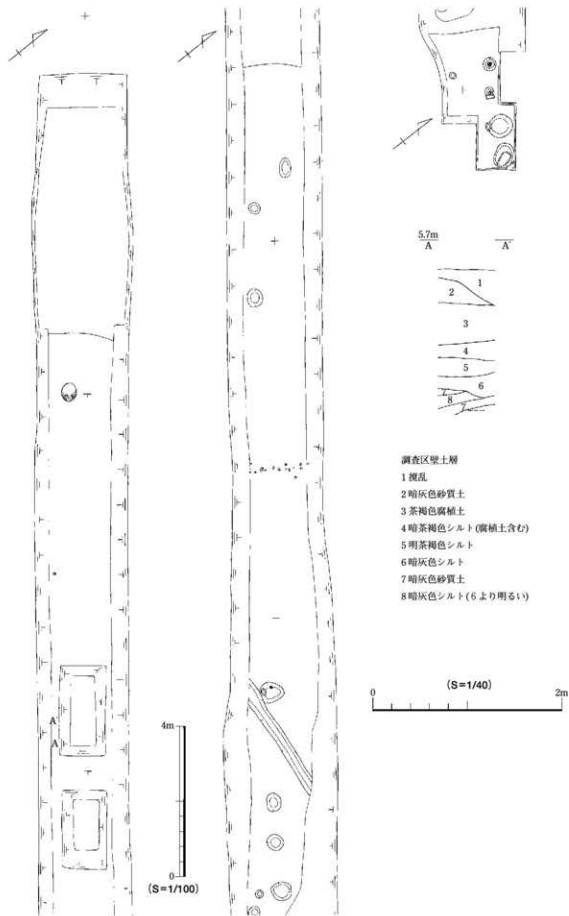
鞍部は調査区中央西寄りで検出した。人力で深掘りした結果、遺物が少ない上に湧水も激しく、砂層を基調とする埋土で崩落する可能性が高いと判断したため全掘はせず、土層記録のみ行なった。検出高5.57m・幅16.5m・深さ1.8m以上を測る。埋土は暗灰色粗砂の下に腐植質のシルトが厚く堆積していた。珠洲焼の小壺(63)・甕(64)・壺(67)・鉢(68)が出土した。北西端の肩の検出面で曲物が出土した。非常に脆い上、埋土に張り付いているような状況であったため持ち帰りはしていない。

調査区南東端で長軸50~70cm、深さ5~10cmのピット列を検出した。埋土は灰褐色粗砂を基調とする。そのうちの1基から柱根状の木製品(71)が出土した。

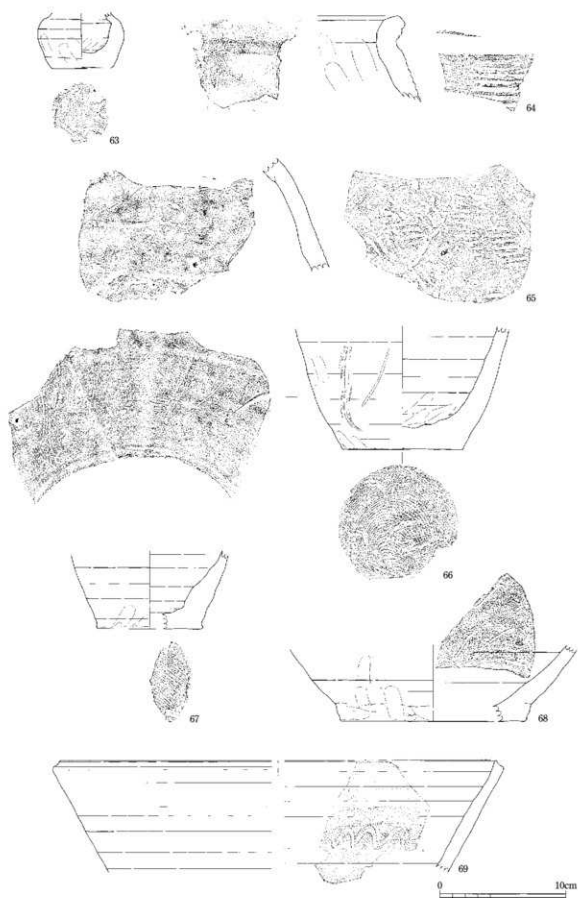
遺 物 (第19~20図)

63~70は珠洲焼である。63は小壺である。焼きが甘く、土師質である。頸部から上は欠損している。強めのナデにより肩には明確な稜が生じ、体部上半から幅厚となり底部に至る。体部外面上半はロクロナデ、下半にはロクロケズリが施され、ケズリ方向は左→右である。底部外面に回転糸切り痕を確認できる。内面の調整はナデで、底部では縦方向にナデが施されている。64・65は甕である。64の口縁は調整不十分で、凹凸の目立つ形状である。65の外面には幅2.8cmで6本の平行タタキが格子状に施されており、工具痕には木目が見える。66・67は壺である。66の外面には櫛状工具による筋が1条ないし3条、縦方向に施されている。底部外面は回転糸切りである。67の内面は黒味が強く、その範囲は断面3分の1にまで及ぶ。68・69は鉢である。68の体・底部境には接合痕を確認できる。内面に波状文が2条施されるが、かなり磨り減っている。底部外面は静止糸切りである。同一個体と思われる破片には内外面に波状文が認められた。69の内面には波状文が横方向に施される。器壁が薄く滑らかで作りが丁寧な印象を受けた。70は甕の底部で内面には焼成時における亀裂が数状に残る。底部外面にはハケ状の接地痕が確認できる。

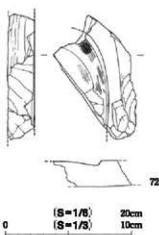
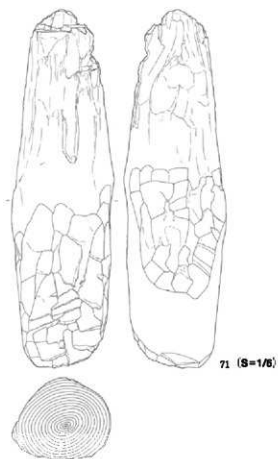
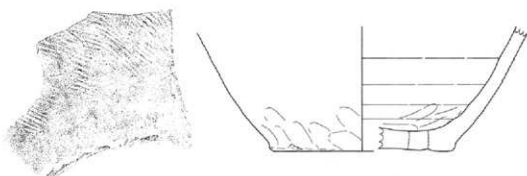
71は柱根状の木製品である。下部に加工痕を明瞭に観察できる。樹種はネムノキという結果が得られているが、柱根として使用するには脆弱であり、周囲にあったものを簡便的に利用したものと考えられる。72は黒色粘板岩製の甕である。欠損部が多く、ウミに墨痕が確認できる。



第18図 遺構実測図



第19図 遺物実測図 (S=1/3)



第4表 遺物観察表

細部 先頭番号	出土地点	器種	種類	口径	底径	器高	色調内面	色調外面	胎土	装束	調整内面	調整外面	備考	
1	D-36	B04E SK01	甕	須恵器	-	-	灰	灰	粗砂・粗砂 含	良	タタキ	タタキ	海綿質針含む	
2	D-34	A02-03E SX10E(灰泥粗砂)	甕	雲部	-	-	灰	灰	粗砂・礫含	良	ナデ	タタキ	海綿質針含む	
3	D-14	B19E SD29	蓋	須恵器	13.1	-	(2.0)	灰	灰	粗砂・細砂 含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ記号
4	D-25	A02-03E SX10E(灰泥粗砂)	蓋	須恵器	-	-	(2.1)	灰	灰	粗砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ・黒丸ヘラ タタキ・黒丸ナデ	海綿質針含む
5	D-21	B16E P46	蓋	須恵器	14.2	-	(1.7)	灰白	灰白	粗砂・粗砂 含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	海綿質針含む
6	D-12	B11E SD14	有台杯	須恵器	11.8	7.7	4.2	灰	灰	粗砂・礫含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・黒丸ヘ ラタタキ	口縁現存率 1/12
7	D-29	B09E P54E(灰面)	有台杯	須恵器	11.8	7.9	4.1	灰黄緑	灰黄・灰	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・黒丸ヘ ラタタキ	黒書
8	D-28	A02-03E SX10E(灰泥粗砂)	無台杯	須恵器	13.9	9.1	3.3	灰	灰	粗砂・細砂 多含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・黒丸ヘ ラタタキ	底部現存率 3/12
9	D-18	B06E P33 B08E SD11	椀	土師器	11.6	6.7	4.1	黒	橙	粗砂含	良	ミガキ	ケズリ・ナデ	海綿質針含む 内里
10	D-9	B10E SD12	椀	土師器	10.1	5.9	4.5	黒	黒	粗砂・細砂 含	良	ヨコナデ・ケ ズリ	ヨコナデ・ケ ズリ	口縁現存率 2/12 黒面赤 (内里)
11	D-10	A02-03E SX10E(灰泥粗砂)	椀	土師器	11.4	-	13.3	黒	橙	粗砂・礫含	良	ミガキ	磨耗	海綿質針含む
12	D-25	B09E SD12	椀	土師器	11.6	6.6	3.7	橙	橙	粗砂礫含む	良	磨耗	ナデ	海綿質針少量 含む
13	D-11	B13E SD11	無台杯	土師質	-	9.3	(2.6)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	粗砂・礫多 含	不 良	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ・黒丸 ヘラタタキ	底部現存率 6/12、黒書?
14	D-08	A04E SD08E(灰泥粗砂)	甕	土師器	-	(7.5)	-	にぶい黄緑	にぶい黄緑	細砂多含	中 良	ナデ	ナデ・ケズリ	海綿質針多く 含む
15	D-39	A02-03E SX10E(灰泥粗砂)	底部	土師器	-	6.4	-	にぶい黄緑	にぶい黄緑	粗砂多含	良	ナデ	ナデ	製塩?
16	D-59	A02-03E SX10E(灰泥粗砂)	底部	土師器	-	5.9	(2.8)	褐灰	黒褐	粗砂・礫多 含	良	ナデ	ハケ・ナデ	製塩?
17	D-17	B08-09E SX3	底部	土師器	-	(7.5)	-	にぶい黄緑	にぶい黄緑	細砂多含	良	ナデ	ナデ	製塩?
18	D-13	B19E SD29	手ぐし	土師器	4.4	-	3.9	浅黄橙	浅橙	粗砂含む	良	ナデ	ナデ	海綿質針含む
19	D-71	B18E検出包 B18E検出	蓋	須恵器	15.3	-	2.4	灰	灰	粗砂少含	良	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ・ナ デ	海綿質針含む
20	D-69	B19E 検出	蓋	須恵器	13.6	-	2.4	灰白	灰白・灰	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ タタキ・ナデ	黒書
21	D-49	B19E 検出	蓋	須恵器	13.2	1.8	2.15	灰	灰	粗砂・礫含	良	ロクロナデ	ナデ・ヘラタタキ・ ロクロナデ	口縁現存率 4/12
22	D-43	B19E 検出	椀	土師器	-	11.0	(2.8)	黒	橙	細砂含む	良	ミガキ	ミガキ	海綿質針含む
23	D-49	B19E 検出	椀	土師器	15.7	-	(3.2)	黒	橙	粗砂・細砂 含	良	ナデ・ミガ キ	ヨコナデ・ハ ケ・ミガキ	口縁現存率 1/12
24	D-42	B08-09E 検出	椀	土師器	14.7	-	(3.5)	黒	橙	粗砂・細砂 含	良	ミガキ ナデ	ケズリ	黒丸ヘラ・黒面赤 記号 黒面赤
25	D-67	B07E 検出	椀	土師器	11.8	6.4	3.4	黒	橙	粗砂含 礫微含	良	ナデ	ヨコナデ・ケ ズリ・ナデ	内里 口縁現 存率 2/12
26	D-39	B19E 検出	有台杯	須恵器	12.6	9.0	4.0	灰	褐灰	粗砂・礫多 含 礫微含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ナ デ・黒丸ナデ	口縁現存率 1/12 海綿質針含む
27	D-79	B19E検出 他	有台杯	土師器	12.2	8.4	3.8	灰	にぶい黄	粗砂・礫多 含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	海綿質針含む
28	D-41	B19E 検出	有台杯	須恵器	14.7	9.4	4.3	オリブ灰	オリブ灰	粗砂や多 含 礫微含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ナ デ・黒丸ナデ	口縁現存率 2/12
29	D-27	B19E 検出	無台杯	須恵器	-	(5.4)	灰黄緑	灰黄緑	礫・細砂含	良	回転ナデ	回転ナデ	海綿質針含む	
30	D-45	B19E 検出	無台杯	須恵器	12.1	8.7	3.3	灰	青灰	粗砂・粗砂 礫含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・黒丸 ヘラタタキ	口縁現存率 4/12
31	D-68	B09E 検出	無台杯	須恵器	13.7	9.9	3.5	灰	灰	粗砂微含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ 回転ヘラタタキ	口縁現存率 8/36
32	D-54	B08-09E 検出	無台杯	須恵器	11.7	8.5	3.1	灰	灰	粗砂微含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・黒丸 ヘラタタキ	口縁現存率 2/12
33	D-57	B08-09E 検出	盤	須恵器	14.8	11.7	(2.4)	灰	灰	粗砂微含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・黒丸 ヘラタタキ	海綿質針含む

第2節 遺構と遺物

器具番号	出土地点	器種	種類	口径	底径	器高	色調内面	色調外面	胎土	境成	調整内面	調整外面	備考	
34	D-23	B18K 焼出	底部	土師器	6	0.2	灰	灰	粗砂・礫多 含	良	ナデ	ハケ・ナデ	海綿骨針含む	
35	D-35	B18K 焼出	底部	土師器	8.9	0.3	橙	橙	粗砂・細砂 多含	良	ナデ	ナデ	平底	
36	D-55	B06~07K 焼出	甕	珠洲	-	0.3	灰	灰	粗砂・細砂 含	良	ロクロナデ	タタキ	海綿骨針含む	
37	D-60	B16~17K 排水	蓋	須恵器	14.4	0.3	灰白	灰白	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・回転 ヘラキ	海綿骨針含む	
38	D-44	B09~10K 甕	蓋	須恵器	11.2	0.6	灰	灰	粗砂・礫含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ ロクロナデ	海綿骨針含む	
39	D-37	B18K 包含層	蓋	須恵器	16.4	0.8	灰	灰	粗砂・礫含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ ロクロナデ	海綿骨針含む	
40	D-22	B08区包含層 焼出面近く	蓋	須恵器	12	2.2	灰	灰	砂粒混入少 ない	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ ロクロナデ	海綿骨針含む	
41	D-61	B11K 甕	蓋	須恵器	12	1.8	灰	灰	粗砂・礫含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	海綿骨針含む	
42	D-72	A1K 包含層	無台杯	須恵器	11.4	8.2	3.7	青灰・灰	灰・暗青灰	粗砂含・礫 少含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ キ	海綿骨針含む
43	D-46	B13~14K 排水	無台杯	須恵器	12.6	9.0	3.15	灰	灰	粗砂・細砂 含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ 回転ヘラキ	攪入?
44	D-15	A区 排水	無台杯	須恵器	12.1	8.0	3.2	灰	灰白	粗砂・礫多 含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ 回転ヘラキ	海綿骨針含む
45	D-43	A区 排水	底部	須恵器	8.3	0.75	灰	灰	粗砂少量	良	ロクロナデ	タタキ・静止 ストキ	海綿骨針含む	
46	D-66	B12~13K 甕	有台杯	須恵器	9.1	0.25	灰	灰	粗砂・礫多 含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ 回転ヘラキ	海綿骨針含む	
47	D-59	表探	有台杯	須恵器	16.4	10.0	4.7	黄灰	黄灰	粗砂・礫含	良	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ・ 回転ヘラキ	海綿骨針含む
48	D-24	B18K 包含層	有台杯	須恵器	13	7.4	3.85	灰	灰	粗砂・礫多 含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	海綿骨針含む
49	D-53	A区 排水	有台杯	須恵器	8.0	0.8	灰	灰	粗砂・礫多 含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ 回転ヘラキ	海綿骨針含む	
50	D-32	表探	有台杯	須恵器	13.4	9.0	3.8	灰	灰	粗砂・礫含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ ヘラキ	海綿骨針含む
51	D-47	B18K 包含層	横	土師器	15	4.3	黒	浅黄橙	粗砂・礫含	良	ミガキ	磨耗	海綿骨針含む	
52	D-48	A2区包含層 焼出面近く	横	土師器	11.5	4.5	4.3	橙	橙	細砂少含	良	不明	ロクロナデ・ 赤色粒多く含 む	
53	D-19	B08K 甕	横	土師器	9.8	0.35	黒	灰・黄橙 浅黄橙	粗砂含	良	ミガキ	ロクロナデ・ ケズリ	海綿骨針含む	
54	D-65	B19K 甕	甕	土師器	16.8	10.7	灰・黄橙	浅黄 灰・黄橙	粗砂含	良	ロクロナデ ハケ	ハケ後ナデ	海綿骨針含む	
55	D-38	A2区包含層 焼出面近く	底部	製塩	-	0.3	浅黄橙	浅黄橙黒	粗砂多量・ 礫含	良	ナデ	指掘直置	海綿骨針含む	
56	D-52	表探	甕	珠洲	-	13.0	灰	灰	粗砂含	良	タタキ ロクロナデ	タタキ・ロク ロナデ	海綿骨針少量 含む	
57	D-61	A区 包含層	鉢	珠洲	12.4	-	灰	灰	2~3mm 礫 多含む	中 良	ロクロナデ	ロクロナデ	海綿骨針少量 含む	
58	D-58	B23K 甕	甕	珠洲	-	0.2	灰	灰・黄灰	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	海綿骨針含む	
59	D-56	B24K 甕	水注	珠洲	8	0.9	灰	灰	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ・不 整形・底置	海綿骨針含む	
63	D-01	甕	小甕	珠洲	4.6	-	灰黄	灰黄	細砂少含	不良	ロクロナデ	ロクロナデ・ ケズリ	海綿骨針含む	
64	D-02	甕	甕	珠洲	-	-	灰	灰	細砂少含	良	タタキ・ロク ロナデ	タタキ・ロク ロナデ	海綿骨針含む	
65	D-16	表探	甕	珠洲	-	-	灰	灰	細砂少含	中 良	タタキ	タタキ	海綿骨針含む	
66	D-05	表探	甕	珠洲	9.5	-	灰	灰	細砂少含	中 良	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ・ロク ロナデ・ナデ	海綿骨針含む	
67	D-03	甕	甕	珠洲	8.2	-	暗灰	灰	細砂少含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	海綿骨針含む	
68	D-29	甕	鉢	珠洲	14.5	-	灰	暗灰	細砂少含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	海綿骨針含む	
69	D-07	排水	鉢	珠洲	34.6	-	灰黒	灰	細砂少含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	海綿骨針含む	
70	D-05	表探	鉢	珠洲	14.3	-	灰	灰	細砂少含	良	ロクロナデ	タタキ・ナデ	海綿骨針含む	

第5章 ま と め

寺社今社遺跡

本遺跡では掘立柱建物を5棟検出した。須恵器・土師器が出土しているが、細片が主体で時期を特定するにはやや決め手に欠ける。柱穴と判断したB9区P34の底面からは須恵器の有台杯(7)が出土しており、時期は田嶋明人氏の編年によるとIV～V期に位置づけられる。遺構の埋土は褐色灰砂を基調とし、掘方の形状は隅丸方形を呈しており、掘立柱建物の遺構埋土・掘方形状とよく似ていたことから、掘立柱建物とP34は同時期である可能性が高い。他に検出した遺構も埋土は褐色灰砂を基調としたものが主体となっており、これに遺構の切合いや検出状況を加味すると、時期はP34に近いと考えられる。

須恵器の杯・蓋から判断すると出土遺物の時期はII～VI期まで認められ、IV期を主体としている。II・III期から集落が営まれ、IV期に最盛期を迎え、V・VI期に衰退していったと考えられる。検出遺構の主時期はIV～V期と想定されることから、最盛期から衰退期に向かう過渡期に構築された遺構群と考えられる。したがって本遺跡は8世紀後半～9世紀初頭を中心とした集落遺跡と評価できる。

本遺跡の近くには北方E遺跡が存在し、8世紀の掘立柱倉庫や漆の付着した多数の土器が確認されている。当時の漆は税の対象とされており、「官」と漆書された土器も出土していることから、北方E遺跡は税として徴収された漆を集積・管理する郡役所の施設であるという見解がなされている。9世紀以降、遺跡は衰退していく。これについては、大同三(808)年に国衙から珠洲に至る官道に設置されていた越蘇・穴水・三井・大市・待野・珠洲駅の六駅が廃止されることによって、陸路より海路の利便性が高いと判断されたため、という見解がなされている。

本遺跡の存続期間は北方E遺跡と重複し地理的にも近いことから、その関連性が注目される。

高照寺墓地

調査区南東端でピット列を検出しているが、しまりの弱い灰色灰砂を基調とした埋土で新しい時期に堆積した土という印象が強く、時期は近世以降と判断した。調査区中央西寄り検出した数部は高照寺墓地の東側縁辺を示すものと考えられる。墓地と思われる遺構は検出できなかった。

高照寺は天喜元(1053)年、法住寺2代目の虚円上人による開基と伝えられている。宝立町春日野にある法住寺は能登国最大の荘園として知られる若山社に強い影響力をもち、珠洲焼の創業に関与したという見解がなされている。そして最古の珠洲焼の窯といわれるカメワリ坂窯跡は高照寺の山手、上戸町南方14部5番の1と同部4番の間の林道及びその周辺に存在が確認されている。

本遺跡で出土した珠洲焼はカメワリ坂窯跡の時期、吉岡康暢氏の編年によるとI期に近いものが多いと思われ、高照寺とカメワリ坂窯跡のつながりを窺える資料を得たことが今回の調査成果の一つと考えられる。

参考文献

- | | | |
|-------------|------|--|
| 上戸知ろう会編 | 1984 | 『上戸の遺跡と伝説地』 |
| 上戸知ろう会編 | 1999 | 『上戸集落誌』 |
| 上戸村史刊行会 | 1956 | 『上戸村史』 |
| 珠洲のれきし編纂委員会 | 2004 | 『珠洲のれきし』珠洲市役所 |
| 田嶋明人 | 1988 | 『古代土器編年輪の設定』『北陸古代土器研究の現状と課題』報告編、北陸古代土器研究会・石川考古学研究会 |
| 吉岡康暢 | 1994 | 『第二部 珠洲及び珠洲系陶器の研究』『中世須恵器の研究』吉川弘文館 |

報告書抄録

ふりがな	すずし じしゃこんしゃいせき こうしょうじぼち							
書名	珠洲市 寺社今社遺跡・高照寺墓地							
副書名	県営ほ場整備(上戸地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	安 英樹、宮川勝二、谷内明央							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	(新)	(新)			
寺社今社遺跡	石川県 珠洲市上戸町 寺社地内	172057	05085	37度 25分 35秒	137度 14分 56秒	20021001 ～ 20021121	470㎡	県営ほ場整備(上戸地区)
高照寺墓地	石川県 珠洲市上戸町 寺社地内	172057	05247	37度 25分 32秒	137度 15分 2秒	20021001 ～ 20021121	100㎡	県営ほ場整備(上戸地区)
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
寺社今社遺跡	集落	古代	掘立柱建物、溝、ビット		土師器、須恵器、曲物			
要約	8世紀後半～9世紀初頭を中心とした集落遺跡である。珠洲部笥の可能性が指摘されている北方E遺跡と地理的に近く、活動時期もほぼ重なることから、その関連性が注目される。							
高照寺墓地	墓地	中世			珠洲焼			
要約	高照寺墓地の東側縁辺を確認した。珠洲焼の最古窯跡とされているカメワリ坂窯跡産と思われる珠洲焼が出土し、当時の高照寺とのつながりが窺える資料を得ることができた。							



高照寺から倒スギを臨む（西から）



調査区から高照寺・倒スギを臨む（東から）



A区 遺構検出状況（西から）



A区 遺構完掘状況（西から）



B1～8区 遺構検出状況（南から）



B1～8区 遺構完掘状況（南から）



B9～12区 遺構検出状況（南から）



B9～12区 遺構完掘状況（南から）



B13～17区 遺構完掘状況 (南から)



B18～24区 遺構検出状況 (南から)



B19～20区 竪溝状遺構検出状況 (南東から)



B18～22区 遺構完掘状況 (南から)



B1区 SB1 (南東から)



B3区 SB2 (北西から)



B5～6区 SB3 (南東から)



B15～16区 SA1 (南から)



B18~19区 SB 5 (南東から)



B 4区 SX2断面 (北東から)



高照寺墓地遺構検出状況 (東から)



高照寺墓地遺構完掘状況 (西から)



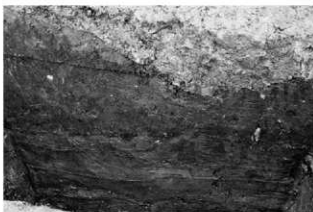
高照寺墓地東端完掘状況①



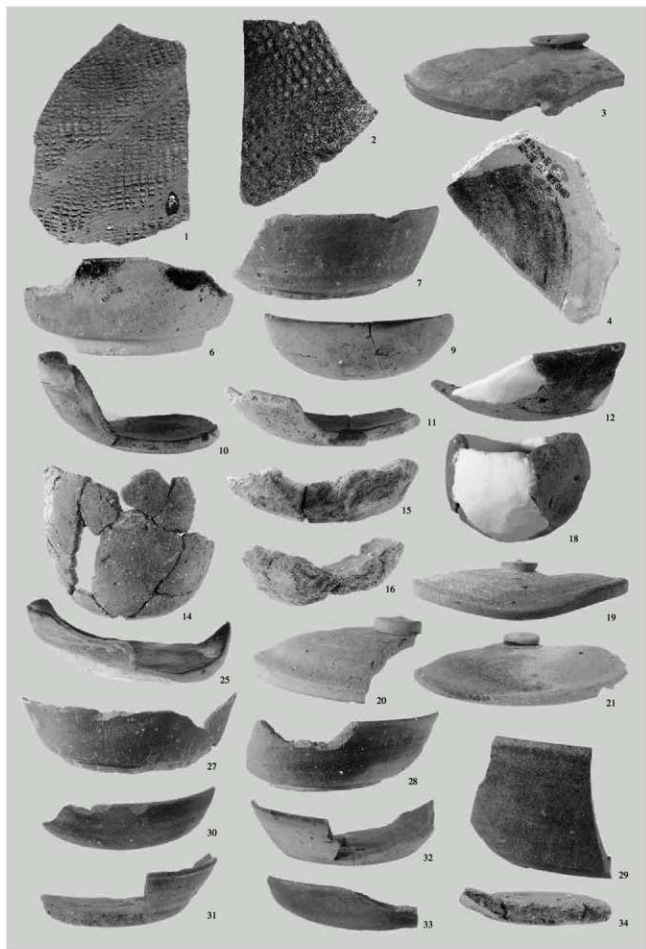
高照寺墓地東端完掘状況②



高照寺墓地出土曲物内完掘状況 (北から)



高照寺墓地鞍部断面 (北から)







調査区全景（北東から）



調査区全景（南西から）



出土遺物

珠洲市 寺社今社遺跡・高照寺墓地

発行日 平成17(2005)年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8675 石川県金沢市殿月1丁目1番地

電話 076-225-1842 (文化財課)

財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1306 石川県金沢市中7町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-mibun.or.jp

印刷 株式会社ハクイ印刷